

## 法学部 小論文

### 【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は13時30分から15時00分まで(90分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に5ページあり、解答用紙は2枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問 以下の課題文を読み、問題1と問題2に答えなさい。

2021年4月、アメリカで人気の料理レシピサイトが大きな注目を集めた。牛肉を「世界最悪の気候犯罪者」とであると指弾し、牛肉を用いたレシピの掲載を停止したのである。

「世界最悪の気候犯罪者の一人に出番を与えない。これは、反牛肉ではなく、むしろ親地球です」

アメリカの人気レシピサイト「Epicurious」は、気候危機への懸念から牛肉を使った新しいレシピを公開しないとすするステートメントを発表しました。牛肉料理よりも持続可能な食事を促すため、牛肉を使った新規レシピの掲載や記事、ソーシャルメディアの投稿はなくなるそうです。2019年以前に公開されたレシピはサイト上に残ります。

牛は消化の過程で温室効果の強いメタンガスを排出することで知られています。気候危機対策の観点から牛肉を食すことを避ける動きは海外で広がりつつあり、日本も無関心ではいられない問題です。

(ハフポスト日本版、2021年4月29日)

地球環境（気候変動）問題についての関心が全社会的に高まっている。とりわけ政治・社会思想的にリベラル色の強いエリート層や、セレブリティとされる人びとの間で顕著だ。地球温暖化問題を喫緊の課題として認識し、一人ひとりがその対策に全力を尽くすべきであるとかれらは主張する。

日々移ろいゆく「政治的ただしさ」への感度がきわめて高いリベラリストは、これからの時代の人間社会にとって普遍的な道徳として見なされるべきだと考えている。持続可能性に鑑みて、牛肉ひいては食肉文化をただしくないものと断じている。レシピサイトでの牛肉料理の取り扱い停止は、この流れの中で生じたひとつの結果である。

いまでこそ「食肉文化を見なおそう」という機運が高まっているものの、わずか十数年前まで、食肉文化に激しい否定的言説や排除行動を向けていたヴィーガニズ

ム（注）に対しては、いま熱心に気候変動問題を訴えている人を含め、世間は必ずしも親和的ではなかった。それどころか「環境問題や動物の倫理問題は大事だと思うけれど、さすがにヴィーガニズムの過激さにはついていけない」と、内心では敬遠している人もけっして少なくはなかった。

ようするに、今日では社会の至るところでその表示を見かけるようになった「SDGs」なるワードが登場する前まで、「反食肉／反肉食」といった機運は、世間一般の人びとはもちろん、政治的ただしさへのアンテナが鋭いリベラリストにとってすらあまり倫理的でもなければ、社会適応的な営みでもなかったのだ。ありていにいえば閉口していたのだ。

しかし 2020 年代になって状況は一変した。イギリスでは銅像が建てられるほど「時の人」となった少女グレタ・トゥンベリに世界的な注目が集まっていることからわかるように、急速に進行する気候変動への具体的な対策の提示は、もはや無視できないほどの世界的課題となったからだ。

2020 年代において、自身の社会的善性を周囲に知らしめるためには、環境問題に対する取り組みをアピールすることは欠かせない要件となった。

これまで食肉文化に反対するムーブメントは、精肉店を襲撃するなどしばしば過激な暴力運動が展開されるなどしていたため、一般大衆とは相容れない政治的に極端な集団の集まりだけに共有されていたものだった。しかしながら「地球温暖化対策」という世界的トレンドが生じたことで状況は一変した。精肉店や畜産業者相手にしばしば暴力的な方法をいとわず抗議運動を展開するラディカルなヴィーガニズムをこれまでは敬遠していた人びとであっても——もちろん暴力運動のような極端な動きには依然として賛同しないまでも——全社会的に食肉文化の縮小および訣別<sup>ケツベツ</sup>を要求する基本的な姿勢では見解の一致を得たのである。

欧米のセレブリティがこぞって「ヴィーガン」を名乗りはじめたのは偶然ではない。地球環境への関心の高まりによって生じた人間社会の倫理的潮流の変化が、世間のヴィーガニズムに対する心理的な抵抗感を減弱したところか、むしろそれが先進的かつ進歩的で、なおかつ道徳的な人間としての具体的な実践であるというメッセージ性を帯びはじめたからだ。かつてはあくまで個々人の努力目標にすぎなかった地球環境への配慮が、2020 年代の時流によって、全社会的・全人类的にすべから

く目指すべき道徳的義務となっていた。

2020年代にはもうひとつの時流の変化が生じた。新型コロナ・パンデミックにより、人間社会の「健康」の定義が大きく改定されようとしている。

2020年代のはじまりとともに発生し、世界にまだ暗い影を落としている未曾有のパンデミックによって、人びとは平時にはけっして意識することのなかった医療リソースの有限性を思い知らされることになった。ひっ迫する病床、供給が追いつかない医療スタッフ、医療機器——一人ひとりの健康状態が、社会の医療リソースや安全衛生に直接的な影響を及ぼしている光景が、ニュース映像を通して伝わった。こうした状況が何年も継続した結果として、世間の人びとは健康をこれまでのように個人の好みや努力目標として語らなくなった。「健康であること」を、社会のメンバーであるならば全員が当然かつ必然的に目指さなければならない「規範」と見なすことになんの違和感も覚えなくなった。

呼吸器系および肺の専門家や医療関係者などからなる国際的な組織である国際結核肺疾患連合は6日、新型コロナウイルスのリスク低減に向け、喫煙者に禁煙を求めるとともに、たばこ会社に製品の製造と販売の停止を呼び掛けた。(…)

連合の声明によると、中国などで行われた新型コロナウイルス患者の予備的研究で、喫煙者は感染するとより深刻な疾病や合併症にかかりやすいことが確認された。また米医学誌ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシンで2月に発表された研究結果では、患者1000人強のうち、人工呼吸器を必要とし、集中治療室に収容され、また死亡した人の25%以上が、現在と以前の喫煙者だったことが示された。

世界保健機関（WHO）と欧州疾病予防管理センターも、喫煙は新型コロナウイルスによる重篤な合併症のリスクにさらすと警告している。

（ロイター、2020年4月7日）

社会で暮らす人びとそれぞれの健康状態が、新型コロナウイルス感染症の重症化のリスクファクターとして——ひいては、医療リソースの安定性や公衆衛生上の

リスクファクターとして——確認されるようになった世界において、「健康であること」は「あくまで個人的なものであり、人それぞれが目指しておくべき努力目標」とは見なされなくなる。社会の医療リソースや秩序の維持のために、個人が必ず達成しなければならない規範として格上げされていく。タバコを例にとるならば、それをたしなむことで呼吸器にダメージを抱えている状態は、「がんや呼吸器疾患のリスクとなるなど、個人の健康を損なう恐れがあります」という警告から「医療基盤に打撃を与えるなど、社会の脆弱性を高める危険性があります」へと、行為の不道德性の規模と重みづけが変わっていくのだ。

私たちは、病床がひっ迫し、ついには病室に入りきらず廊下で延々と待たされる世界中の罹患者たちの姿を、連日のようにニュースで見ることになった。全世界の人が医療リソースの有限性について否応なしに考えなければならなくなった。このパンデミック以降の人間社会においては、健康であることは、個人の好みで心がけるかどうかを選んでよい問題ではなく、社会のまっとうなメンバーシップを得るためには必ず守らなければならない絶対的ルールとして位置づけられる。健康であることは単に「健康である」ことを意味するだけでなく、道徳的かつ倫理的であり、そして人間として「正道である」ことをも含意するようになっていく。

逆にいえば、不健康であることはあくまで「個人的に損をする」という結果だけにとどまらない。個人が不健康であることを通して、社会全体に不利益と迷惑をもたらす「悪」として再定義され、厳しい視線を向けられることになる。ましてや、不健康を「人生を楽しんでいる証拠だ」として誇らしげに語るなど言語道断だ。

食肉にしても喫煙にしても、これらに向けられる社会的な逆風は、「個人の自由」がこの社会からますます失われていることを示唆している。

2020年代は、「個人的なことはすなわち社会的なこと」という社会的感覚を人間社会にくっきりと浮かび上がらせた。これまでの時代であれば個人的な楽しみや幸福の追求にすぎなかった事象や営為が、否応なしに社会全体へと接続され、与える影響や是非を厳しく査定されるような機運が高まっていく。

食肉文化も喫煙習慣も、それは単に個人的な好みや楽しみの問題として見逃されなくなる。いずれも「それは社会の健全性や道徳性の観点から認められるべきか」というまなざしを避けられない。この流れは牛肉やタバコだけにとどまるはずがな

い。社会的には必ずしも益はない、むしろ健康や経済などの観点からすれば有害ですらある一方で、しかし個人的な幸福をもたらすものとして愛好されてきたものは、そのすべてがターゲットになりうる。アルコール、カフェイン、糖質、脂質、なんでもそうだ。

2020年代は、個人的な営為があくまで「個人的なもの」のままで完結するような余白がさらに失われていくことになる。「健康で健全な個人が集まる社会」を目指すことをだれも拒否できなくなる。

たとえ不健康で不健全で不利益で不採算で不道徳であろうが、人がそれぞれ幸福を感じる行動や嗜好<sup>しこう</sup>を選択することは基本的人権のひとつとして擁護されていた。そのような幸福な時間はもう長くは続かない。人びとの営みは「個人の自由や権利」の領域から引き剥がされて「社会化」あるいは「政治化」されていく。社会的・政治的に望ましいものにだけ、その営みを楽しんでよい自由が保障され、そうでないものは制限されるか、最悪の場合はまったく与えられなくなる。

(注) できるだけ動物からの搾取を避け、牛肉・豚肉・鶏肉などの肉類のみならず、卵や乳・チーズ・ラードなど動物由来の食品を一切とらない生き方のこと。また、そのような生き方をする人をヴィーガンという。

(御田寺圭『ただしさに殺されないために——声なき者への社会論』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。)

問題1 課題文を要約しなさい。(400字以内) (150点)

問題2 下線部で述べられているような、人がそれぞれ幸福を感じる行動や嗜好が、社会的・政治的に望ましいものであるかどうかという観点から制限されることについて、具体例を挙げながらあなたの見解を明らかにし、その理由を説明しなさい。

(440字以内) (150点)